

菅原道真の和歌

林 優大

(山本 淳子ゼミ)

目次

はじめに

第1章 菅原道真の和歌の紹介

第2章 菅原道真の和歌の取り扱われ方

第3章 菅原道真の和歌の比較

おわりに

はじめに

菅原道真は平安時代に活躍した人物であるが様々な一面を持っている人物だと思う。例えば学者としての一面や詩人としての一面、さらに怨霊としての一面もある。その中で私は歌人としての道真に注目して卒業論文を書いていきたいと思う。菅原道真の家系は漢学の家系なので漢詩が専門なのだが和歌も残している。漢詩の家系なのに和歌も詠んでいる点に興味を持ったので卒業論文のテーマにしようと思う。

第1章 菅原道真の和歌の紹介

菅原道真は生涯で38首和歌を詠んだと言われている。その中から何首かピックアップして道真がどういいう思いで詠んだ、どういう状況で詠んだなど、和歌の紹介をしていきたいと思う。和歌を紹介する前に菅原道真

の紹介をしていきたい。これについては国史大辞典から引用する。なお、内容の整理のため、段落を改めた箇所がある。

平安時代前期の学者、政治家。承和十二年（八四五）生まれる。父は菅原是善。母は伴氏。菅原氏は奈良時代の古人以来代々の学者の家であった。道真の祖父清公、父是善はいずれも学者の誇りとする文章博士・式部大輔に任じ、公卿の地位に列した。道真も幼少より父の厳格な教育をうけ、十一歳で詩を賦した。貞観四年（八六二）文章生、同九年文章得業生となり、同十二年方略試を受けて合格した。時に二十六歳である。これより順調に官途を進み、少内記から民部少輔を経、元慶元年（八七七）式部少輔・文章博士に任じた。学界はこの道真の昇進を快しとせず、いろいろないやがらせをした。特に同四年八月父是善が没してから、道真はいよいよ学者の非難の矢面に立った。かれは博士である一方、父祖の経営した私塾である菅家廊下を背負ったからである。この廊下から出た秀才・進士は百人に近く、隠然たる学界の一勢力であった。同七年渤海客使裴頰らが加賀国に到着したのを迎えるために加賀権守を兼ね、かりに治部大輔の事を行えという命をこうむり、裴頰と詩を唱和し、接待員としての任を果たした。仁和二年（八八六）道真は讃岐守に任ぜられ、文章博士・式部少輔の任をはなれた。これは菅家門下の勢いが隆盛をきわめるのを恐れた学者たちが、一時道真を地方に転出させ一派の勢いを抑えようとした運動が効を奏したのでもあろう。讃岐在任の四年間はいかにとっては無聊に苦しんだ毎日であった。しかしかれは熱心に国務にあたり、地方人民の生活を直接に知り、他日国政

の衝にあたる素地を培ったといえる。またこの間に阿衡問題（阿衡の紛議）が起ったが、道真は藤原基経に見解書を呈出し、この問題が学者の将来を萎縮させ文章を廃滅させるであらうことを憂え、基経自身のためにも何ら得るところはないことを諄々と説き、阿衡の詔書の作者橘広相のために適切な弁護を試みた。

寛平二年（八九〇）国司の任期を終え、帰京してからの出世はめざましい。同三年蔵人頭・式部少輔・左中弁に任じた。宇多天皇の信任を得て、一躍政治の中枢部に関与したといえる。同六年には遣唐大使に任ぜられたが、派遣の事は実現されずに終った。この理由については古来いろいろの議論があるが、そのころ遣唐使が奈良時代の昔のような意義を失っていたことは事実である。珍奇な唐物の輸入は毎年來航する商船によってまかなわれていたし、巨大な組織となった使節の派遣に要する費用も財政上の負担となっていた。そして当時唐は凋弊し、使節が安全に唐の都に達することができず、どうか不安の材料であつた。もつともこれらのことは十分に知られた上で、なお遣唐大使を任命しているのだから、実行を中止した理由は別に求めねばならなくなる。直接の動機は、六年九月十四日付で提出した道真の、諸公卿に遣唐使の進止を議定することを請うた奏状にもとづき、停止を決定したのであるが、任命はその一月前の八月二十一日なのである。任命後一月もたたないうちに実行をやるめるのは、初めから実行の意志のない形式だけの任命であつたのではないか。大使の道真、副使の紀長谷雄は、停止決定後もなおその官銜には大使・副使の職を称すること数年に及んでいる。この間かれの官位の昇進は急である。

七年十月中納言に任じ従三位に叙した。父祖は三位にまで進んだが、中納言に任じた者はなかった。かれは五十一歳の若さで父祖を超えた官職に就いたのである。この年春宮権大夫を兼ねたが、これは天皇が東宮の輔導に道真の力を期待したからである。九年権大納言に任じ右大将を兼ねた。同日藤原氏の家督時平も大納言に任じ左大将を兼ねた。良房・基経と代々群臣の上首を占めた藤原氏にとって、まさにそれに雁行しようとする道真の官位昇進は基経の嫡子時

平にとっては目の上の瘤である。

この年宇多天皇は讓位し醍醐天皇の時代となる。昌泰二年（八九九）時平は左大臣・左大将に、道真は右大臣・右大将に任じ、両者の地位の拮抗にゆるぎはない。そこで時平およびその一味は、道真の女が天皇の弟齊世親王の室となっているから、ひそかに廢立を企てていると讒言し、延喜元年（九〇一）突如として、道真は大宰権帥に左遷された。官途にあつた四人の男子も諸国に左遷せられ、顕榮の座をきわめた道真に思いがけぬ悲運がおとずれた。大宰府での生活は窮迫をきわめ、病魔にも犯された。そして同三年二月二十五日大宰府で没した。五十九歳である。遺言によって大宰府に葬る。そこが安樂寺であるという。

道真は文人学者として古今にたぐい稀な人であつた。その詩文は『菅家文章』『菅家後集』として伝わるが、唐の詩文の形を自家薬籠中のものとし、日本的な情緒を表わした作品は絶妙をきわめる。歴史家として『三代実録』の撰修に与り、『類聚国史』も編修した。後世かれの冤が明らかにされ、朝廷や藤原氏に不幸も続いたので、その靈魂を慰めるために正暦四年（九九三）正一位・太政大臣を贈られた。また天満天神として崇められ、京都の北野に祭られた北野神社は二十二社の中にも加えられた。

（『国史大辞典』『菅原道真』坂本太郎）

これを見てみると、道真は本当に優秀な人に思える。道真は若い頃から少内記や民部少輔や式部大輔、文章博士を歴任している。例えば、式部大輔は式部省の次官2人の内の上位の者であり、儒家で天皇のそばに仕え学問を教授する学者でないと成れない職であり、また文章博士は、平安時代の大学寮紀伝道の教官で教官の中で最高位の位の職である。昇進は異例であるが道真がいかに優秀かがわかる。その反面、ほかの学者から嫌われていることもわかる。

さてここから本題の菅原道真の和歌について紹介していこうと思う。

菅原道真の和歌

菅原道真の和歌一覧

番号	掲載作品	和歌	その他の掲載作品
1	拾遺和歌集 1006 卷第十六 雑春	東風吹かば 匂ひをこせよ 梅の花 あるじなしとて 春を忘るな	大鏡・時平伝 十訓抄 宝物集
2	同1216 卷第十九 雑恋	あめの下 のがる人の なけれ ばや 着てし濡れ衣 干るよしも なき	大鏡・時平伝
3	同479 卷第八 雑上	天つ星 道も宿りも 有りながら 空に浮きても おもほゆる哉	
4	同480 卷第八 雑上	流れ木も 三とせ有りては あひ 見てん 世のうき事ぞ かへらざ りける	
5	新古今和歌集 1690 卷第十八 雑歌下	あしびきの こなたかなたに 道 はあれど 宮こへいざと いふ人 ぞなき	
6	同1691 卷第十八 雑歌下	天の原 茜さし出づる 光には いづれの沼か 冴え残るべき	
7	同1692 卷第十八 雑歌下	月ごとに 流ると思ひし ます鏡 西の浦にも 止まらざりけり	
8	同1693 卷第十八 雑歌下	山わかれ 飛びゆく雲の 帰りく る かげ見る時は 猶たのまれぬ	大鏡・時平伝

番号	掲載作品	和歌	その他の掲載作品
9	同1694 卷第十八 雑歌下	霧たちて 照る日の本は 見えず とも 身は感はれじ よるべあり やと	
10	同1695 卷第十八 雑歌下	花と散り 玉と見えつつ あざむけ ば雪降るさとぞ 夢に見えける	
11	同1696 卷第十八 雑歌下	老いぬとて 松はみどりぞ まさり ける わが黒髪は 雪のさむさに	
12	同1697 卷第十八 雑歌下	筑紫にも 紫おふる 野辺はあれ ど なき名悲し ぶ人ぞ聞こえぬ	
13	同1698 卷第十八 雑歌下	刈萱の 関守にのみ 見えつるは 人もゆるさぬ 道べなりけり	
14	同1699 卷第十八 雑歌下	海ならず 湛へる水の 底までに 清き心は 月ぞ照らさん	大鏡・時平伝
15	同1700 卷第十八 雑歌下	彦星の ゆき逢ひを待つ 鵲の 門渡る橋を われに貸さん	
16	同1701 卷第十八 雑歌下	流れ木と 立つ白波と 焼く塩と いづれか辛き わたつみの底	
17	同1441 卷第十六 雑歌上	谷深み 春の光の をそければ 雪につつめる 鶯の声	

番号	18	19	20	21	22	23	24
掲載作品	同1442 巻第十六 雑歌上	同1449 巻第十六 雑歌上	万代和歌集 3054 巻第十五 雑歌二	同3061 巻第十五 雑歌二	続後撰和歌集 1088 巻第十六 雑歌上	万代和歌集 452 巻第二 春歌下	後撰和歌集 57 巻第二 春中
和歌	降る雪に 色まどはせる 梅の花 鶯のみや わきてしのばん	道のべの 朽ち木の柳 春くれば あはれ昔と しのばれぞする	夕されば 野にも山にも 立つ煙 なげきよりこそ 燃えまさりけれ	忘れ草 名のみなりけり 見るか らに 言の葉しげく なりまさり つつ	まとろまず ねをのみぞ鳴く 萩 の花 色めく秋は 過にし物を	紫の 糸縫りかけて 咲く藤の 匂ひに人や 立ちとまるらん	さくら花 主をわすれぬ 物なら ば 吹き来む風に 事づてはせよ
その他の 掲載作品			大鏡・時平伝				

番号	25	26	27	28	29	30	31
掲載作品	88 続後撰和歌集 巻第二 春歌中	同57 巻第二 春歌中	古今和歌集 272 巻第五 秋歌下	新古今和歌集 461 巻第五 秋歌下	拾遺和歌集 351 巻第六 別	古今和歌集 420 巻第九 羈旅歌	後撰和歌集 1356 巻第十九 離別・羈旅
和歌	けさ桜 ことにみえつる 一枝は いはの垣根の 花にぞ有ける	雁がねの 秋なくことは ことわ りぞ かへる春さへ 何か悲しき	秋風の ふきあげに立てる しら ぎくは 花かあらぬか 浪のよす るか	草葉には たまとみえつつ わび 人の 袖の涙の 秋のしら露	君が住む 宿のこずゑの ゆくゆ くと 隠るるまでに かへりみし はや	このたびは 幣もととりあへず 手 向山 紅葉の錦 神のまにまに	水ひきの 白糸延へて 織る機は 旅の衣に 裁ちや重ねん
その他の 掲載作品	万代和歌集				大鏡・時平伝 拾遺抄		

菅原道真の和歌

番号	掲載作品	和歌	その他の掲載作品
32	後撰和歌集 1357 巻第十九 離別・羈旅	ひぐらしの山路を暗み 小夜ふけて 木の末ごとに 紅葉照らせる	
33	新拾遺和歌集 1385 巻第十六 神祇歌	紅にぬれつつけふや 匂ふらん 木の葉うつりて 落るしぐれば	
34	新続古今和歌集 2079 巻第二十 神祇歌	花もさき 紅葉もちらす 一枝は 吹きなす風を いかがうらみん	
35	玉葉集 2744 巻第二十 神祇歌	風はやみ 波のさわぐに まがひ つる 衡の声は たえやしぬらん	
36	続古今和歌集 688 巻第七 神祇歌	撫子の うすくもこくも 日くる れば みむ人分て 思ひさだめよ	雲葉和歌集
37	同 689 巻第七 神祇歌	竹のよも 我が世もともに 老にし をくち葉さやにも おける霜哉	新撰朗詠集
38	同 690 巻第七 神祇歌	松の色は 西ふく風や そめつら ん うみの緑を はつしほにして	

(本文の出典)

拾遺和歌集(新日本古典文学大系)

万代和歌集(国歌大観)

後撰和歌集(新日本古典文学大系)

続後撰和歌集(同右)

新古今和歌集(新日本古典文学大系)

続古今和歌集(同右)

(新編日本古典文学全集)

玉葉集(同右)

古今和歌集(新編日本古典文学全集)

新拾遺和歌集(同右)

(新日本古典文学大系)

新続古今和歌集(和歌文学大系)

万代和歌集(和歌文学大系)

これらが菅原道真が詠んだとされる和歌である。見ていくと意外と和歌を残しているのだと思う。道真の家系は漢学なので漢詩も多く詠んでいるが、和歌も残している印象を受ける。

さて和歌をこの順番にした経緯だが、これは和歌の部立ごとに分けた。1〜22が雑歌、23〜26が春歌、27〜28は秋歌、29は別、30〜32は羈旅・離別の歌、33〜38は神祇歌となっている。雑歌は和歌の分類で歌集の部立の一つで、四季・恋・賀・哀傷・旅・別など以外の歌で歌材や歌の内容において明確に分類できない雑多の物を言う。例えば風や月のように季節感のないものを詠んだ歌、不遇や老いなどを嘆く述懐の歌のことを言う。羈旅は旅に関する感懷を詠んだ和歌で、離別は旅立ちの別れの情を詠んだ歌であるがこの二つは密接な関係であり、『拾遺和歌集』では離別部に羈旅歌を含んでいた。『新古今和歌集』以降では羈旅部に離別歌が含まれていた。神祇歌は神祇信仰の和歌であり、神社の縁起を詠んだ歌や祭礼の歌や神詠の歌の総称のことである。神祇歌の確立は1086年に完成した『後拾遺和歌集』からである。そのためこれ以降に編纂された和歌集に載っている道真の和歌は神祇歌の扱いになっている。でもその中で神祇歌の中に入っていない歌もある。それは次の章で説明したいと思う。

ここで道真の和歌の特徴として、雑歌が多い印象を受ける。これは妹尾好信氏の『菅原贈太政大臣集』(文化十二年刊・鱸貞治編)―翻刻と解題―によると、都を離れる際の心境を詠んだ歌や太宰府への旅の道中歌、配流の地の太宰府で詠んだ歌が雑歌扱いになっている。したがっ

て配流地に向かっていてる心情を詠んだ和歌や配流地にいる時の気持ちを
読んだ和歌などの和歌が多くなっている。

ここからそれぞれの和歌の訳や説明、この和歌を詠んだときの時代背
景や心情を論じていきたいと思う。

最初に紹介する和歌は1「東風吹かば 句ひをこせよ 梅の花 あ
るじなしとて 春を忘るな」という和歌である。この和歌は菅原道真の
ことをあまり知らない人でも聞いたことがあるのではないかと思う。私
が知る道真の中で一番有名な和歌である。この和歌は拾遺和歌集や宝物
集、十訓抄、大鏡時平伝など多くの和歌集に載っていたり、説話集に伝
承されたりしている。

詞書…流され侍ける時、家の梅の花を見侍て

1 東風吹かば 句ひをこせよ 梅の花 あるじなしとて 春を忘るな
訳（もし東風が吹いたならば、配所の筑紫にいる私に、風を託して
句いを送って寄越してくれよ梅の花よ、たとえ家の主人がいな
くなったとしても、花の咲く春を忘れるな）

…（『拾遺和歌集』新日本古典文学大系二八八ページ）

この和歌は詞書にも「流され侍ける時、家の梅を見侍て」とあるよう
に菅原道真が筑紫に配流される時に邸宅に咲く梅の花に別れを惜しんで
歌ったといわれている歌である。この和歌が詠まれた時代背景は昌泰
4年（901）正月25日に無実の
罪を着せられた道真が太宰府へ流
される前に愛着があった邸宅の梅
の花を詠んだとされている歌であ
る。私はこの和歌を読んで、自分
の大切にしていた梅と別れるのは
寂しいという気持ちを詠んでいる
と思う。さらに本当に梅が好きなの
だとわかる和歌となっていると思
う。道真は梅を愛好していたそ



紅梅殿（撮影 筆者）

の邸宅は紅梅殿と呼ばれている。この上の写真は紅梅殿である。またこ
の道真が詠んだ梅は飛梅伝説という伝説が残っている。この伝説は道真
の邸宅にあった梅の木が太宰府の方まで飛んだという伝説で、その他に
も桜の木と松の木があり、桜の木は道真がどこかに行ってしまったとい
う悲しみで葉が落ちて枯れたとされていて、松の木は梅の木と一緒に飛
んだが松の木は力尽きて摂津国八部郡今の兵庫県神戸市辺りに落ちたと
されていて、それが飛松伝説とされている。

また、道真は梅の木だけでなく、桜の花の和歌を残している。

詞書…家より遠き所にまかる時前栽の桜の花にゆひつけ侍

ける

24 さくら花 主をわすれぬ 物ならば 吹き来む風に 事づてはせよ
訳（桜花よ、おまえがここの家主を忘れぬものであるならば、私の
方に吹いて来る風に伝言してくれよ）

…（『後撰和歌集』新日本古典文学大系二二ページ）

これを見てみると、「東風吹かば」の和歌とはほ一緒のように感じ、
訳もほぼ一緒のような感じである。同じような和歌なのに掲載されてい
る和歌集も違うし、和歌の部立が違うのも不思議である。後撰和歌集を
編纂した人の考えがあるのかと思うし、後撰和歌集が成立したのが天曆
七年（953）とされているので時代によってどこに部立に入るかわ違っ
たのかと私は思う。梅と桜の違いもあるし。梅と桜は時期が違うので、
そのために違うことも考えられる。

ここから和歌の意味の説明をしたいと思う。「東風吹かば」の東風は春に
東方から来る風という意味がある。なぜ春風のことを東風という風に表現す
るかという点、これは中国の自然哲学が由来している。それは五行説という
考えで、この思想は万物は「木・火・土・金・水」の5種類の元素に分類
されて方角や季節などすべての概念がそれぞれの要素に結びつけられると
されている思想である。その「木」の分類は東と春が結びつけられてい
る。さらに「木」は木の花や葉が幹の上を覆っている立木が元になってい
て、樹木の成長や発育する様子を表していて春の象徴とされている。その

ため春風のことを東風と表現している。道真の家系は漢学の家系で道真自身も漢詩が専門だったのでその事を知っていたのではないかと私は思う。

次にこの和歌の末尾句の違いについて論じていきたいと思う。この和歌は出典によって違うものになっている。「春を忘るな」と「春な忘れそ」である。これはどちらが正しいのか私の考えを論じていきたいと思う。まず、この和歌が最初に掲載されたのは1006年に編纂された『拾遺和歌集』である。そこでは「春を忘るな」となっている。「春な忘れそ」の初出はその180年後の『宝物集』で初めてそのように掲載されている。宝物集を編纂した平康頼によって何らかの変更が加えられたと思われるがその真意はわからない。『宝物集』のことを簡単に説明すると、世の中の真の宝は何かについて書かれた仏教説話集である。また、他の和歌集や説話集でも表記が別れている。単純に考えれば先に掲載された方が道真が詠んだオリジナルという考えに行き着くと思うので「春を忘るな」が正しいのかと思う。先行研究で調べていくと「春を忘るな」の方が道真のオリジナルではないかと言われているが、実際の所どちらが正しいかはわからない。そこで私の推測で論じていくが、『拾遺和歌集』は天皇や上皇の命令により編纂した勅撰和歌集で、『宝物集』は平康頼が個人的に編纂した説話集なので、信頼度で言うと『拾遺和歌集』が上だと思う。したがって、私は「春を忘るな」が道真のオリジナルなのかと考える。

次に紹介する和歌は、30「このたびは 幣もとりあへず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに」である。この和歌は最初に紹介した和歌と違って道真が筑紫には配流される前に詠んだ和歌である。

詞書…朱雀院の、奈良におはしましたりける時に、手向山にて、よみける

30 このたびは 幣もとりあへず 手向山 紅葉の錦 神のまにまに

表「東風ふかば」の二つの第五句と掲載資料

春を忘るな	春な忘れそ
・拾遺和歌集 ・大鏡 ・源平盛衰記 ・延慶本平家物語	・宝物集 ・十訓抄 ・古今著聞集 ・太平記

訳（この度の旅行は幣も用意せぬまま参りました。ここは手向けの場所でありますから、幣の代わりとして風の散る美しい紅葉を神様にはお気持ちのままにご受納いただくことにしましょう。）

…『古今和歌集』新日本古典文学大系一三九ページ

この和歌の詞書には「朱雀院の、奈良におはしましたりける時に、手向山にて、よみける」とある。訳すと「宇多上皇が奈良にご旅行なさった時に、手向山で詠んだ歌」となる。朱雀院ここでは宇多上皇という意味である。この朱雀院とは三条と四条の朱雀大路に面した邸宅で、宇多天皇以降に天皇の邸宅になったので、宇多上皇が朱雀院と呼ばれたものである。この和歌が詠まれた背景は、定かではないが一説によると、昌泰元年（898）十月の宇多上皇の吉野宮滝への行幸の時の歌といわれている。行幸とは天皇が皇居を出て、よそへ行くという意味。この行幸は盛大で歌人も多数御供したと言われている。『扶桑略記』によれば、大納言右大将の菅原道真が筆頭で供奉の責任者と記されている。

ここから和歌の意味を説明したいと思う。まず「このたび」という部分は「この度」と「この旅」を掛けている。幣は神への供え物で細かく切った五色の絹で、「とりあへず」は前もって心積もりして用意しないという意味。つまり神への供え物を前もって用意しなかったという意味になる。次に「手向山」は手向けする山の意味で、手向けることは神などに捧げ物をする意味。さらにこれは旅の安全を祈って幣を手向ける山という意味になる。この手向けの相手は神を指す。ここまでを整理すると、「道祖神に旅の安全を祈る供え物を用意するのを忘れたので」という風になる。さらに「紅葉の錦」は錦のように美しい紅葉という意味で、「神のまにまに」は「神」は道祖神、今でいうお地蔵さんのことで、「まにまに」はままととなる。つまり、「道祖神に旅の安全を祈る供え物を用意するのを忘れたので、代わりに美しい紅葉を気持ちのままに受け入れてくれるようにしましょう」となる。この和歌を見ていると道真は宇多天皇と仲が良く、信頼されていたのだと思った。

ちなみにこの手向山の場所は、本論では吉野宮滝としているが、実際の所はどこかわからない。ただし行幸の旅の経路からすると大和（今の

奈良県」と山城（今の京都府）の間とされている。しかしなぜただで吉野宮滝に行ったと言えるのかは、この和歌以外にも吉野宮滝で詠んだとされている和歌があるからである。

詞書…法皇、宮の滝といふ所御覧じける、御供にて

31 水ひきの 白糸延へて 織る機は 旅の衣に 裁ちや重ねん

訳（水を引くようにして出来た白糸を伸ばして織った布は、今度の旅の衣として早速裁つて縫い、重ねて着てみましょうよ。）

…〔後撰和歌集〕新日本古典文学大系四二一ページ〕

この和歌がそれではないかと私は思う。理由は詞書の中に宮の滝と書かれていることと、『後撰和歌集』新日本古典文学大系の脚注に「宇多天皇の吉野宮滝行幸は昌泰元年十月のことである時に法皇に詠んだ歌」とあったからである。また同じ脚注では、「水ひきの」は「はつきりしないが、滝のこととして水を引き伸ばすという風に訳す」とのことである。さらに次の和歌も吉野宮滝の行幸で詠んだとされている。

詞書…道まかりけるついでに、ひぐらしの山をまかり侍りて

32 ひぐらしの 山路を暗み 小夜ふけて 木の末ごとに 紅葉照らせる

訳（1日歩いた日暮らしの山は、道が暗かったので、夜がふけると、かえって木の梢ごとに紅葉が月に輝いて見えることであるよ。）

…〔後撰和歌集〕新日本古典文学大系四二二ページ〕

新日本古典文学大系『後撰和歌集』によると、この和歌の「ひぐらしの山」というのが地名であろうが、該当するものが見つからない。しかし同じ宮滝行幸の作である。前歌との関係を考えれば、その近所の山であったと考えるとよいとされている。さらに『新勅撰和歌集』『羈旅』の源昇の和歌に「亭子院、宮滝御覧じにおはしましける御供につかうまつりて、ひぐらし野といふ所をよみはべりける」という詞書が見えるので、私は吉野宮滝で詠まれたのかなと思う。この和歌の意味の説明をするに、「日暮らしの山路」は一日中、日を過ごした山路の意味に掛けている。

「紅葉照らせる」は紅葉が月光を反射して照り輝いているものである。

これらを見わたすと、三つの和歌を別々に見てみると全く違う和歌だが同じ場所で詠まれている。道真は同じ場所でも多種多様な和歌を詠んでいると思うし、和歌の才能もあったのだと思う。他には、一度の旅で色々な和歌を詠んでいるのでこの旅で色々な感情を想ったのだと私は思う。私には3つの和歌は同じ場所で詠んでいるように思える。なぜなら、掲載注釈書の脚注にもそのように推測されているし、各和歌集の部立で同じ羈旅・離別に分類されているからである。しかも「ひぐらしの」と「水ひきの」の和歌は『後撰和歌集』に載っていて、「このたびの」と「水ひきの」の和歌は『古今和歌集』に載っている。違ふ和歌集なのに部立は同じなので、同じ場所なのではないか。

次に紹介する和歌は27「秋風の ふきあげに立てる しらぎくは 花かあらぬか 浪のよするか」である。この和歌も配流される以前に詠まれた歌で、部立は秋歌に分類される。

詞書…同じ御時、せられける菊合に、州浜を作りて、菊の

花植へたりけるに加へたりける歌。吹上の浜の形に、菊植へたりけるを、よめる

27 秋風の ふきあげに立てる しらぎくは 花かあらぬか 浪のよするか

訳（秋風が吹き上げている「吹上」の浜に立っている白菊は、花なのか、そうでないのか、あるいは波が寄せているのか。）

…〔古今和歌集〕新日本古典文学大系九三ページ〕

この和歌の詞書には「同じ御時、せられける菊合に、州浜を作りて、菊の花植へたりけるに加へたりける歌。吹上の浜の形に、菊植へたりけるを、よめる」とある。訳すと「同じく宇多天皇の御代に催された菊合で、州浜で作り菊の花を植えて飾ったが、その菊に結びつけた歌。吹上の浜の模型に菊が植えてあったのを詠んだ歌」となる。この和歌の時代背景は、寛平三年（891）までの秋の名所の菊合を詠んだ和歌というものである。菊合とは左方・右方に分かれて菊に歌の短冊を結びつけて提示し合って優劣を競う遊びである。つまり宇多天皇が開いた菊合とい

う遊びで詠まれた歌ということである。

この和歌の意味の説明は、詞書から始めたい。州浜とは海岸の州に似せて作った模型で宴席や歌合の調度品として使われる。次に「加へたりける歌」というのは、この和歌が載っている古今和歌集のこの和歌から以下4首にかかる詞書という意味。つまりこの和歌の詞書はこの和歌だけの詞書ではない。次からの和歌にも関わる説明である。「ふきあげ」は風が「ふきあげ」と地名の「ふきあげ（浜）」を掛けている。「花かあらぬか浪のよするか」というのは見立表現の一つで、具体的に分析的に表現している。これは私が考えるに、道真が作った州浜に植えている白菊を花なのか・また違うのか・それとも白菊が吹上の上の浪を表現しているのかという事だと思う。この和歌の要約をしてみると、州浜の菊に結んだ歌だから題詠的な歌であるが、道真の好みそうな華麗な風景が想像されると思う。確かにここまで紹介した歌では、素材として風景を見て歌を詠んでいる。それだけでなく植物も織り交ぜて詠んでいる歌が多い印象を受ける。またこの和歌を見てみると、私の見解では、天皇が催している遊びに参加しているので天皇の信頼があったことがわかる。さらに技巧的には、道真の和歌は二つの意味を掛けている言葉（掛詞）が使用されているものが多いという印象を受ける。

ここまでは道真が配流される前の和歌、もしくは配流する直前に詠まれた和歌を紹介してきた。ここから配流される途中の歌、また配流地で詠んだ和歌をいくつか紹介したいと思う。

まず紹介するのは、29「君が住む 宿のこずゑの ゆくゆくと 隠るるまでに かへりみしはや」という和歌である。この和歌は道真が太宰府に流されている最中に詠まれた歌とされている。

詞書…流され侍て後、言ひをこせて侍ける

- 29 君が住む 宿の梢の ゆくゆくと 隠るるまでに かへりみしはや
訳（私が太宰府へ下向した時に、あなたが住む家の樹木の梢が去って行くに従って、次第に隠れてついに見えなくなるまで何度も振り返って見ることだ。）

…〔拾遺和歌集〕新日本古典文学大系一〇一ページ〕

この和歌は、『拾遺和歌集』では昌泰4年（901）正月25日に道真が太宰権帥として配所へ向かっている時に現地から京都に残した妻の元に贈って寄越した歌とされている。『大鏡』によると贈歌という風にせず、悲しみを道真が心中に凝縮させた歌にしている。

次に和歌の意味の説明をしたいと思う。まず「君」は和歌の訳を見る限り、道真の妻のことを指していると思う。しかし『拾遺和歌集』にはそのことについては明記されていない。しかし『大鏡』によると歌の中の「君」は宇多上皇と北の方（妻）という二つの説がある。『大鏡』では「やど」の語から北の方であろうという見解になっている。これは「北野天神縁起」に北の方に贈ったと明記があるからである。『拾遺和歌集』での訳では「あなたが住む家」と言う風に訳されているので、人を指していることになる。どちらが正しいかは不明だが、私は道真の妻という説だと思う。さらに、「ゆくゆくと」というのは去って行くにつれてという意味で、「はや」というのは詠嘆、強い感動を表している。「行く」の反復や「はや」により切実な心情を表している和歌である。さらに、この和歌は「源氏物語」の「真木柱」巻に「梢をも目とどめて、隠るるまでぞかへり見たまひける。君が住むゆゑにはあらで・・・」と引用されている。この和歌は無実の罪で流される自分自身が無念で切実な思いで詠んだ歌だと思う。また、この和歌を自分の妻に贈っているあたり、妻のことを強く愛していたと思う。次に紹介する和歌は2「あめの下 のがるる人の なければや 着てし濡れ衣 干るよしもなき」である。この和歌も昌泰4年（901）正月25日道真が太宰権帥として左遷された時の詠作といわれる伝承歌とされている。『大鏡』では「雨の降る日に物思いにおふけりになってお詠みになった歌³⁾」とも言われている。

詞書…流れ侍ける時

- 2 あめの下 のがるる人の なければや 着てし濡れ衣 干るよしもなき
訳（雨の降り続く天の下一面は乾いている所がないからであろうか、強いられて着たこの無実の濡れ衣は乾かし晴らしようがないようだ）

…〔拾遺和歌集〕新日本古典文学大系三五三ページ〕

『拾遺和歌集』では、この和歌の第2句は「のがるる人の」となっているが、『大鏡』では「乾けるほどの」となっていて、出典によって違いがある。この違いは編纂した人によるものだと私は思う。私の見解は「のがるる」の意味は「逃げる」や「避けて遠ざかる」という意味なので、両方とも意味としては変わらないのかと思う。さらに『大鏡』には生前の最後に「干るよしもなき」と冤罪が晴れない絶望の歌で閉じたという風になっている。このことから生前の最後にこの和歌を詠んだのではないかと思う。また『江談抄』という平安時代の説話集には道真が無実の罪の由の祭文が天に昇ったと語り、また道真御託宣の詩を何話か収めて神格化の過程が伺えるとあった⁴。

次に、和歌の意味の説明をしたいと思う。「あめの下」は「雨の下」と「天の下」を掛けている。「のがるる」は紹介したように「逃げる」「避けて遠ざかる」という意味である。次に「着てし濡れ衣」というのは着ている衣が雨で濡れているのと、無実の罪という濡れ衣を掛けていく。「干るよしもなき」は「干る」というのは乾くや潮がひくという意味がある。ここでは乾くという意味で活用されている。「よし」は理由など色々な意味があるが、ここでは理由で活用されている。したがってここではこの濡れ衣が乾く理由がないという風になると私は思う。要するに、私が背負った濡れ衣は雨で濡れた衣のように乾くことができないという風に詠んでいると思う。

次から紹介する和歌は『新古今和歌集』から紹介したいと思う。この和歌集の特徴としては、道真が配流地で詠んだ和歌が載っている。そしてこれから紹介する和歌は道真が太宰府の配流生活の厳しい述懐を詠んだ和歌としている。『新古今和歌集』の1690(1690)がその歌に該当する。これらの和歌は詞書が単語一つで表されているのも特徴である。

詞書…山

5 あしびきの こなたかなたに 道はあれど 宮こへいざと いふ人ぞなき
訳 (山のあちらこちらに道は見えるが、「さあ都へ」と言ってくれる人がいない)

…(『新古今和歌集』新日本古典文学大系四九三ページ)

まず紹介する和歌は5「あしびきの こなたかなたに 道はあれど 宮こへいざと いふ人ぞなき」である。この和歌を要約すると、無実の罪が晴れて都へ帰る道への切実な願いに、力を貸してくれる人は一人もいなかった。その懊悩の叫びがこもった歌となっている。この詠歌群は筑紫における歌になっている。私の考えは、道真は都に帰って以前のような生活をしてみたいと思ってもそれを助けてくれる人はいないという嘆きの和歌だと考える。

次は和歌の意味の説明をしたいと思う。「あしびきの」は山の枕詞であり、ここでは直ちに山の意味である。「こなたかなた」は「こちらにもあちらにも」という意味で、「宮こへいざと」は「京都へいざゆかん」という意味になる。

詞書…日

6 天の原 茜さし出づる 光には いづれの沼か 冴え残るべき
訳 (大空に、茜色をして出てくる日の光には、どの沼が凍ったままで残ろうか、残りはしない)

…(『新古今和歌集』新編日本古典文学全集四九三ページ)

この和歌も前に紹介した和歌と同じで配流地の筑紫で詠んだとされている和歌である。この和歌を説明すると、日の光がすべての沼の水を解け去らせる情景の中に、帝の暖かい恵みがすみやかに身に届くことを願う心情の切なさや響き出ている。光は帝の恩光、沼は左遷した我が身に擬し、前歌ともども恩沢を期待する激しい嘆きを歌っている。

次に和歌の意味を説明すると、「天の原」は「大空」という意味で「茜さし出づる」は「茜色をしていてさし出る日の光」のことで、茜色は少し沈んだ赤色のことで、このことから夕方に詠んだ和歌だと私は考える。後、茜さすの「さす」とさし出づるの「さし」を掛けている。また、「茜さす」が日の枕詞として用いられる。次に「冴え残るべき」というのは「凍ったまま残ること」という意味がある。この和歌は「私は帝の恵に当たることなくずっと凍ったまま」ということになる。

詞書…月

7 月ごとに 流ると思ひし ます鏡 西の浦にも 止まらざりけり
 訳（月の出るごとに西へ向かつて流れると思ったそのます鏡のよう
 な月は、西の浦にもとどまらないことだ）

…（『新古今和歌集』新編日本古典文学全集四九四ページ）

この和歌は西に流れても都に帰る月に、道理を踏みながら西に流された自身に比べての述懐で、帝が見捨てるはずがないという自負が感情を表した和歌になっているとされている。この帝が見捨てるはずがないというのは、帝に氣に入られていた自信があるということになる。この帝はどの帝とは記されていないが、信頼されていた宇多上皇のことだと考えられる。月が西に向かつて流れていて、めぐって東に行くのを見て、道真も罪が晴れて東にある都に帰れるに違いないという強い思いを詠んだ歌だと思われる。

この和歌の意味を説明すると、「月ごとに」は「月が出ることに」という意味で、「流る」というのは西に向かつて流れるという意味になる。また、「ます鏡」とは澄んだ鏡という意味や、よく澄んだ月をたとえたものという意味がある。これは道理を正しく踏んだ潔白な作者のことを暗示している。このことから道真はこの語句に、今まで何も悪いことしておないのには何をしているのだろうという思いを込めたものと私は思う。さらに「西の浦」とは太宰府の地を暗示している。ちなみに第4、5句で月が天にめぐって東の空に出るように、作者もまた罪が晴れて東の都に帰れるに違いないという心を暗示している。

ここまで『新古今和歌集』の和歌を紹介してきたが、ここまでの和歌に共通しているのは、都へ帰りたいもしくは、都に対して強い思いを抱いた和歌になっている。道真が都を愛し、もしくは、執着しているといっても過言ではない。しかしそういう気持ちになっても仕方がないと思う。なぜなら道真が太宰府に流された経緯は、藤原時平の陰謀により無実の罪で流されたものである。自分は何も悪いことをしていないのに、都を離れなければならない。それならば都へ対する気持ちも強いものになると思う。

最後に、神祇歌に分類される和歌を紹介する。これは道真歌が学問の神様が詠んだ歌として扱われる和歌である。そのため内容的には普通回道真が詠んだ歌となっている。

左注…これは北野の御歌となん、

34 花もさき 紅葉もちらす 一枝は 吹きなす風を いかうらみん
 訳（この一枝は、花も咲かずし、紅葉も散らす。ことさらに吹く風をどうしてうらまうか、いやうらまない）

…（『新統古今和歌集』和歌文学大系）

この和歌は『新統古今和歌集』に掲載されている和歌で、『夫木集』では「花もちり紅葉もちらす」となっている。この和歌は左注にもあるように北野天神の神詠となっている。しかし夫木集では菅原道真の歌となっている。これは夫木集には神祇歌という部立がないためこのような扱いになっていると思われる。

次に和歌の意味の説明だが、この「一枝」というのは道真自身のことや「花もちり紅葉もちらす」の所は、自分が都に暮らしていた時、右大臣にまでなつて人生の絶頂だった時と、濡れ衣で太宰府まで配流して暮らしていたのを表現しているのではないか。次に「吹きなす風」とは自分の邪魔をする邪悪な存在を表しているのではないかと思う。ここでは藤原時平のことではないか。でも今更恨んでも仕方が無いからもう恨まない」と詠んだ和歌なのではないだろうか。

さて、ここまでの第1章では、和歌の紹介をしてきた。が、他にも道真の和歌は存在する。道真は都で生活していた時から、配流されている途中や配流地でも和歌を詠んでいる。このことから私は二つのことを考察したいと思う。まず一つ目は、道真は和歌が好きだったという考えである。調べていく中で道真はあらゆる場面や和歌に表現している、和歌が好きだったのだと考える。二つ目は、和歌を詠むことで気を紛らわしていたのではないと思う。これは配流された時の和歌に限ることだが、道真は配流されてストレスが溜まっていたものと私は考える。それを紛らわすた

めに見た物を和歌にして発散していたのではないかと思う。

第2章 菅原道真の和歌の取り扱われ方

この第2章からは菅原道真の和歌がどのように扱われていったのかを論じたいと思う。道真の和歌は様々な勅撰和歌集や私撰集に掲載されている。それだけ道真の和歌が認められている証拠だと思われる。また、扱われ方としては『後拾遺和歌集』以降の歌集で道真の歌は神祇歌扱いになると思われる。なぜなら道真は903年に没していて、神祇歌が出来た頃にはもう天神信仰があったと思うので、神祇歌に入っても不思議ではないからである。しかし神祇歌に入っていない歌もある。それを中心にして第2章は進めていきたいと思う。さらに取り扱われ方について言うと、道真の名前の変遷である。和歌集を見ていくと和歌集事に道真の名前が変わっており、全部が全部ではないが変わっている和歌集がある。例えば、1の和歌が載っていた『拾遺和歌集』では「贈太政大臣」となっていたが、「古今和歌集」では「菅原朝臣」となっていたり、「新古今和歌集」では「菅贈太政大臣」となっていたりなど本論の調査の限りでも結構違っていた。なぜ歌集ごとに名前の表記が違うのかはわからないが、私が思うに歌集を撰者した人の考えがあるのかと思われる。「贈太政大臣」というのは没後に太政大臣を贈られた人のことを指しているので、意味合いはそれぞれあると思われる。さて、ここからは山口正代氏の論文「神になった歌人菅原道真の和歌―『続後撰集』から『続古今集』へ―」を参考にしながら進めて行きたいと思う。この論文は『続後撰集』（1251年成立）から『続古今集』（1265年成立）までの14年間に道真歌に何が起ったのかを考察した論文になっている。まず『続後撰集』に載っている和歌が神祇歌の部立に入っていないという所から始まっている。私もこれには疑問に思っている。『続後撰集』が成立した時代は天神信仰もすでに存在しているから、道真の歌が神祇歌に入っていないのも不思議ではないと思う。山口論文によると25の和歌が『続後撰集』の前に成立した『万代和歌集』にも載っている。そこでも神祇歌に入らず『続後撰集』と同じような部立に入っている。『万

代和歌集』も成立が1248年なので天神信仰があるので私はこれに対しても不審と思われる。これを見てわかるのは『続後撰集』の撰者の藤原為家が『万代和歌集』の撰者と考え方が似ているということである。神祇歌という部立がありながらそこに入れないのは何か考えがあるのかもしれない。極端に言えば道真の天神信仰を信じていなかったのかもしれない。ちなみにこの『万代和歌集』の撰者が藤原光俊と藤原家良なのだが、この2人は『続後撰集』の後に成立にした『続古今集』を撰者として一緒にいる。このことからこの3人の道真歌に対する考え方は一緒のように思える。ただ山口論文を見てみると、そういうわけではないことがわかる。光俊・家良は反御子左派の歌人で、御子左派は平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて著名になった歌人の藤原俊成と定家の親子が出てきてからの歌道の家系のことだが、為家は御子左派の出身である。

山口論文によれば「為家対反御子左派光俊・家良という構図が考えられ、それがそのまま『続後撰集』と『続古今集』における道真歌の扱い方の相違につながっている。」とあるがこの部分が私は疑問に思った。なぜなら先ほど言ったように『続後撰集』と『万代和歌集』における25の和歌の取り扱いは酷似しているものであり、ならば藤原為家はおそらく『万代和歌集』も参考にして作っていると思うので、撰者の考えは一致しており、一緒に作ればトラブルなく進むものだと思える。ただ御子左派の為家とそれの反対派の光俊・家良というだけで、道真の歌の扱い方が変わるのかと私は疑問に思う。

次に『続古今集』での道真歌では3首入っているがそれらは神祇歌の扱いになっている。この3首がそれ以前にどんな和歌に載っていたかという点、藤原基家撰の『雲葉和歌集』、藤原基俊撰の『新撰朗詠集』に載っている。それらの和歌集では神祇歌には入っていない。ここでも和歌の取り扱われ方の相違が見られる。さらに『雲葉和歌集』の撰者である藤原基家は『続古今集』の撰者でもあるため少なからず神祇歌以外の部立に入れる案もあったと思われる論文にもある。これに関しては私も同意である。それに加えて神祇歌に入れるかどうかの議論もあったと思われる。さらに藤原為家も撰者として入っているのでそこでも色々議論があったと思われる。なぜなら『続後撰集』の時は神祇歌に入っていない

が、『続古今集』の時は神祇歌に入っている。自然に考えれば『続後撰集』と同様に扱いたいと考えていると思うので色々あったと思われる。もしくは『続後撰集』の時は一人で選んでいたので自分の思い通りに出来たと思う。しかし『続古今集』の場合は撰者が一人ではないのと、ライバル関係の人物がいるのでひとりよがりでは出来ない、他の撰者に合わせたいという風に捉えられるかもしれない。あるいは『続後撰集』後の道真歌は神祇歌に入っていて、『続後撰集』、『続古今集』のあたりから道真が神様として奉られたのではないかと思う。逆に言えばそれまでは神格化がそこまで浸透していなかったのかと私は思う。

山口論文を読んでみて、道真歌の変遷があるのだと思われた。これらの和歌集が出来た時代は道真も亡くなって天神信仰もあったので神祇歌が確立してから全部神祇歌に入っていると思ったが、撰者によって考え方、捉え方が違うのだと思った。

第3章 菅原道真の和歌の比較

この章が最後の考察となる。この章では菅原道真の和歌の比較をしていきたい。ここでの比較は道真が配流する前の和歌、配流後の和歌の比較をしていきたいと思う。なぜ道真の和歌の比較をしようと思ったかは、道真の人生は私が思うに波乱万丈な人生で天と地を経験した。その人生を通して和歌を作っていたので、心境の変化、和歌の変化も見られると思ったからである。

まず私が思ったのは詠んでいる内容である。配流前の和歌の多くは景色であったり、植物であったり、見たものを詠んでいる和歌が多いが、配流後は見たものも詠んでいるが、それに自分の想いや願い、嘆きなどを入れて和歌が多い印象を受けた。

また、和歌には掛詞という技巧が存在する。掛詞というのは和歌の修辭法の一つで同音異義を利用して一つの語に二つの意味を働かせる技法のことだが、道真の和歌はこれを利用して和歌が多い。配流前の和歌は例えば、30の和歌の「このたびは」では「この度は」と「この

旅は」を掛けてるように和歌を詠んでいる場所や情景などプラスの考えの掛詞になっているが、配流後は2の和歌の「濡れ衣」は「濡れた衣」と「罪の濡れ衣」のようにマイナスの考えの掛詞がある。

さらに、配流後の和歌では道真自身を暗示している和歌がある。一方配流前の和歌では道真が暗示している和歌がない。例えば、28の和歌に出てくる「わび人」は寂しく暮らしている人という意味があるが、これは失意のため嘆き暮らしている作者自身のことを暗示している。後、7の和歌の「ます鏡」はよく澄んだ月をたとえたもので、潔白な作者を表していたりする。これは私が思うに、配流前は自分自身のことを気にしなくても周りに気に掛けてくれる人がたくさんいたから形式や情景の和歌を詠んでいたが、筑紫に流されて1人になってしまつて自分を気に掛けてくれる人がいなくなつたその想いを発散するために、和歌にその想いを込めたのかと私は思う。後、後々に和歌が残つたときに道真の和歌を見られるようにしたのかもしれない。自分ではなくても自分が作つた和歌には気に掛けてほしいという思いもあるかもしれないと思った。このことから私は道真は寂しがりな一面もあるのだと思う。その他にも道真は若くして出世していったから周りから忌み嫌われていたので、そういう経緯があるのかと思う。

この他にも、配流後の和歌は先ほども言つたが自分の想いを和歌に入れている。配流前は見た景色などの感想を和歌に入れている印象を受けたが、配流後は自分の想いを和歌に入れていると感じた。例えば、8の和歌では都に戻れるかもしれないという期待を詠んでいた。先ほど自分の想いを和歌に入れていると言つたが、どれも共通しているのが「都に帰りたい」という思いが多い。やはり濡れ衣で流されているので都に帰りたいという思いが強いがゆえのことだと思われる。

さらに配流前と配流後での違いでいうと。配流後にのみ鶯が和歌に入っている。これに関しては明らかな理由はわからない。が、鶯が入っており、「遺賢」や「賢者」という意味として使われている。「遺賢」というのは朝廷などの政府にいないのに優秀な人物という意味で鶯は優秀な人物という意味で使われている。17の和歌にも鶯が出てくるのだが、ここでの意味は私は道真自身のことを指しているのではないかと思う。まず、鶯は冬の間は谷に籠もるとされているが、これは道真が太宰府に

流されたことと類似している。また、鶯は遺賢という意味があると先にもいったが、これは道真に当てはめると意味が通る。朝廷に属していない優秀な人物↓道真ということになり、これもまた鶯は道真の暗示をしている。つまりこの和歌は、「なぜ、私は優秀なのに朝廷に属していないのか」という疑問を詠んだ歌になっている。

ここまで配流前と配流後の和歌の違いを述べてきたが、私が思ったのは、意外と違うことがあるということである。道真は人生で色々な経験をしたので、和歌に対する考え方、どういう和歌を詠もうと思ったかが変わっていったのかと思った。

おわりに

本稿では、菅原道真の和歌について論じてきたが、まず和歌について言うなら和歌は色々な内容と形に変化するものなのだったと思った。菅原道真は波瀾万丈の人生で色々なことを経験したと思う。その人生の中で和歌を詠んで、心境の変化などがあつて変化していったと私は思う。詠む人の気持ち次第で変わるのだと初めて知った。次に菅原道真の和歌については道真の和歌はまず掛詞が多いという印象を受けた。和歌を詠むに当たって掛詞はメジャーな技法で歌人は当たり前に使うかもしれないが、道真は別に歌人というわけではなく、むしろ漢詩が専門なので詩人という印象を持つ人が多いかもしれない。だが和歌も多く残っていて、しかも百人一首にも選ばれていたり、和歌集や私撰集にも載っていたりするので、歌人としても大成した人だと私は思う。また、道真が残した和歌だが私が調べた中では38首残しているが、これは多いと思った。先ほども言ったように漢詩が専門なので和歌のイメージがないと思うが、意外と和歌を詠んでいるという風を感じた。さらにその和歌に漢詩である中国の要素を入れた和歌も詠んでいるので、うまく融合させたのだと思った。

最後に私は菅原道真の和歌というあまりメジャーではないジャンルについて卒業論文を論じてきた。私も調べる前まではよくわからなかったが調べていく内に徐々に惹かれていった。学者としての一面や怨霊の

一面がフューチャーされがちだが私はもっと和歌についても注目されてもいいと思ったし、もっと道真の和歌の研究がされたら面白いと思う。

- 1 妹尾好信『菅原贈太政大臣歌集』（文化十二年刊・鱸貞治編）―翻刻と解題―『広島大学大学院文学研究科論集』2018年、78巻、pp.43-58
- 2 新編日本古典文学大系『源氏物語』③、pp.374
- 3 新編日本古典文学大系『大鏡』pp.80
- 4 巻五第二話―一七話。新日本古典文学大系『江談抄』pp.180
- 5 山口正代「神になった歌人菅原道真の和歌―『続後撰集』から『続古今集』へ―」『古代中世国文学』2007年、23号
- 6 山口論文 pp.86-91

参考文献・資料

- ・拾遺和歌集（新編日本古典文学全集）
- ・後撰和歌集（新日本古典文学大系）
- ・新古今和歌集（新日本古典文学大系・新編日本古典文学全集）
- ・古今和歌集（新編日本古典文学全集・新日本古典文学大系）
- ・新続古今和歌集（和歌文学大系）
- ・万代和歌集（和歌文学大系）
- ・万代和歌集（国歌大観）
- ・続後撰和歌集（同右）
- ・続古今和歌集（同右）
- ・玉葉集（同右）
- ・新拾遺和歌集（同右）
- ・国史大辞典（吉川弘文館）
- ・大鏡（新編日本古典文学全集）